

小学生を対象とした「子どもが作る町」の実施



この事例のポイント

- ・学生主体での実践的な学びの創出
- ・子どもや地域の視点に立った共通目的の明確化
- ・地域との連携、卒業生との持続的な関わり

この取組を行った背景や目的

大学と地域が協力して企画・実施することで、地域とのつながりを深め、子どもたちの健全な成長を支える環境づくりに寄与することを目指しています。保育士を含む様々な職業に触れることを通して社会の仕組みを楽しみながら学ぶことができます。子育て支援室では親子が安心して過ごす空間を高校生が体験することが目的です。

実施した内容① 「ミニたまゆり」の実施

対象：5歳から15歳までの子どもが参加。

方法：年に1度、2日間にわたり開催。1・2年生の学生約150名がスタッフとして運営し、教員はサポートに入ります。

内容：学内で開催する「子どもが作る町」です。子どもたちは町の住民となり、保育士や警察官、税務署職員、飲食店店員として働き、給料を得て税金を納め、買い物や遊びを楽しみます。

労働の喜びやお金の大切さを体験しながら、社会の仕組みを学ぶことができます。町の住民は5歳から15歳の子どもだけで、学生や教員は見守り役となります。運営は学生が中心で、地域住民と協力して準備・広報・運営・報告までを担っています。

本学入学者の中には、このイベントへ幼少期に参加したことがあったり、高校生の時にボランティアとして運営に携わったりした経験がある方もいます。



ミニたまゆりHPはこちら

実施した内容② DCU子どもひろば:みらい

対象：乳幼児。スタッフとして、教員、保育士(卒業生)、学生が参加。

方法：通常は事前予約制の子育て支援室を、学園祭当日は予約不要で開室。

内容：学園祭当日は大学内の子育て支援室を開放し、親子が気軽に立ち寄れるほか高校生も見学ができます。卒業生も保育士として活躍しています。親子が過ごす子育て支援室を体験することで、地域の子育て支援を担うだけでなく、卒業後も大学との繋がりが続いていくことを身近に感じてもらえる機会です。



実践するためのヒント

○成功や継続するためのポイントや要因

教員が学生の取り組みを否定することなく見守り、学生自身が企業と直接交渉を行っています。事前に、どのような仕事体験を提供するかを学生と企業が共に考えることで、実践的な学びが生まれていると感じます。

学生には、“誰かのために力を尽くす意識”や“自ら生み出した体験で子どもが喜ぶことへの感動”が培われています。「子どもにより良い経験をしてもらうにはどうすれば良いか」という共通の目的意識があり、それが活動を支え、継続する大きな力となっています。

さらに、毎年実施する保護者・子どもへのアンケートを通じて振り返りを行い、次年度に活かすというPDCAサイクルが機能している点も重要です。前年度の意見を踏まえた「ゴールを明確にする」ことを重視して取り組みを進めています。

○実施体制：取組にかかった組織、費用

運営にあたっては大学の予算として約50万円を充て、あわせて参加者からは1日あたり500円/人の参加費を徴収します。2日間で延べ1,500人が来場し、参加費収入と大学予算により運営費を確保しています。大学内での開催であったため人件費や会場費は発生せず、また協力頂く企業も地域貢献の一環として無償で取り組みに参加するなど、全体として費用を抑えながら円滑な運営が可能となっています。

○今後の取組の方向性

ミニたまゆりにおける保育士のお仕事体験は、現在、卒業生の保育士に協力をお願いしています。大学への還元という点では、卒業生の継続的なかわりは必要であるが、今後は近隣の保育所やこども園とも連携し、地域との繋がりの強化を考えています。また、在学生の就職先の拡がりにも繋がっていきます。